書　評

石油評論社発行，1986年　　奥田英雄，橋本啓子　訳編

アメリカ合衆国戦略爆撃調査団・石油・化学部報告

日本における戦争と石油

評者　斎　藤　雄　志*
Takeshi Saito

本書は第2次世界大戦におけるわが国の石油産業の戦争における役割と米国の爆撃による被害の状況について述べたものである．戦争におけるエネルギー資源の役割の重要性についてはいまさら述べるまでもないが，本書には非常に豊富な写真や図表が含まれており，当時のわが国がおかれた状況を石油の観点から振り返ってみるのに極めてよい材料を提供してくれる．

本書はアメリカ合衆国戦略爆撃調査団（United States Strategic Bombing Survey）の石油・化学部報告“Oil in Japan's War”を訳出したものであるが，長い間戦略爆撃調査団ライブラリーに秘匿されていたものとのことである．

本書はおおよそつぎのような構成になっているが被害の状況の説明にかなりの頁数をさいており当時の生々しさを今に伝えている．

第1部　日本の戦争における石油の役割
　第1章　真珠湾攻撃以前の日本の石油産業の分析
　第2章　戦時下の石油産業の命運
　第3章　空襲による被害
　第4章　空襲とその効果
第2部　被害製油所の惨状

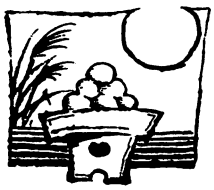
戦前のわが国と米国の工業生産力の間には非常に大きな差がありそれが戦争の基本的方向を決めたことはよく知られているが，本書の様々な図表をみるとその違いに改めて驚くばかりである．年間国内原油生産量，年間石油精製能力，年間原油処理量，液体燃料在庫量，製油所労働者1人1日当り製油量などをみてみるとまさに巨人と小人の差がある．昭和16年の年間原油生産量は米国が14億バレルであるのに対してわが国は190万バレルにすぎず，米国は日本の700倍の生産力を持っていた．いわゆる人造石油も戦争遂行の大きな力にはならなかった．一方，需要を見ても同じ昭和16年で，航空ガソリン，自動車用ガソリン，ディーゼル油，重油，潤滑油計で2300万バレル程度であるにすぎず攻撃相手国の米国の70分の1であった．（それぞれ0.159をかけるとkℓになる）

さらに本書の分析によると，日本は米国のシェアが80%にのぼる輸入石油によって戦争をしかけたという．国内生産量は戦時必要量のわずか10分の1であった．

これらの数字を見て感ずることは，この大きな彼我の差でよく戦争を行ったものであるということのほかに，当時と現在の日本の経済規模の差である．当時の人々には，わが国が現在のように大きくなることは容易に想像できなかったに違いない．もっとも現在我々が当然と思っている（あるいはまだ豊かでないと感じている人々も多い）ごく普通の生活を支えるためには年間2億kℓを越える石油が必要というのもある意味では驚きであり，心配な面もある．

第1部第3章以後はわが国石油産業の言葉どうりの惨状を大量かつ詳細な写真により示してくれる．わが国の主要な石油精製工場，石油貯蔵基地の被害状況，爆撃状況は，当時を知る人々にとっては，特別の意味を持つに違いない．

本書は，ドキュメンタリー映画のように過去の歴史を肌で感じさせてくれるばかりでなく，資料としても価値が高い．



* 専修大学経営学部教授
〒214　川崎市多摩区東三田2－1－1